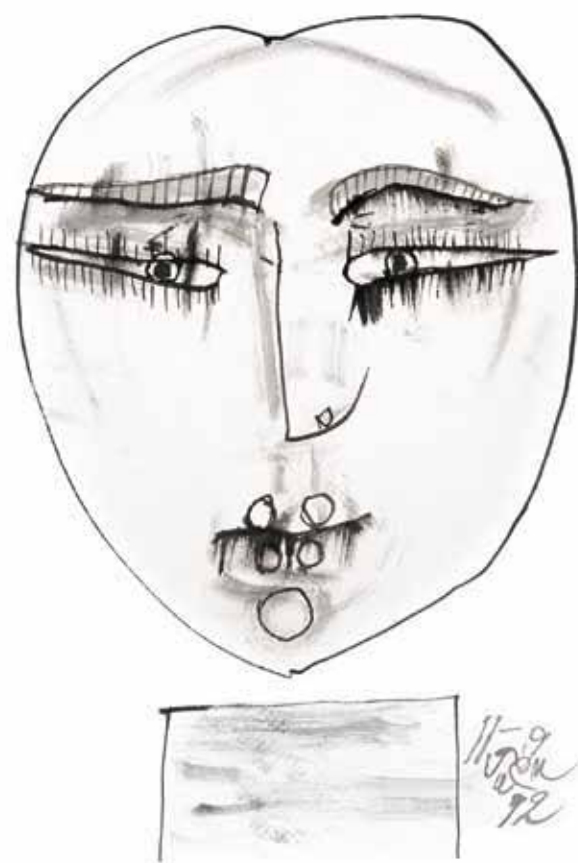
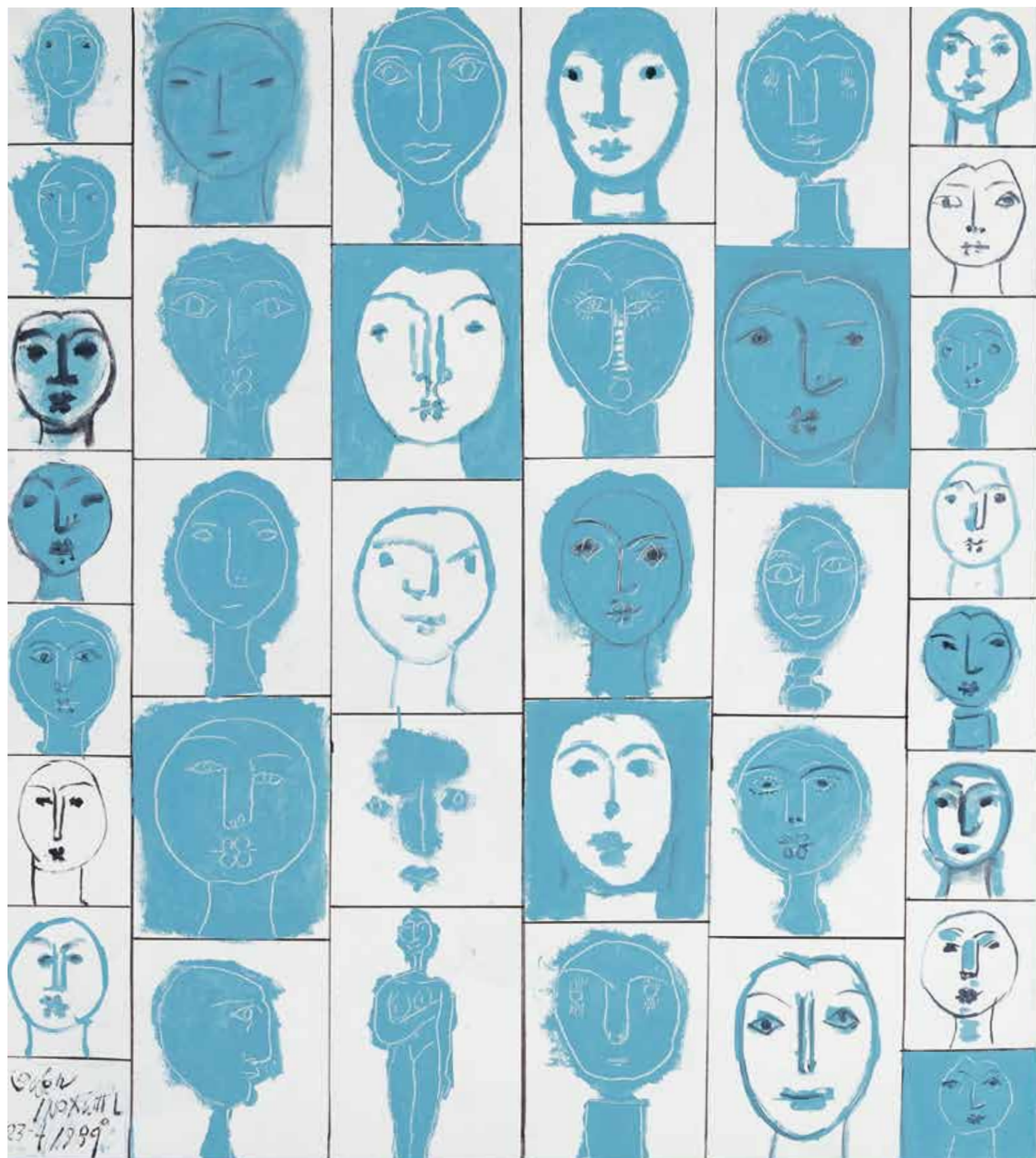




猪熊弦一郎展

Genichiro Inokuma INOKUMA SAN

「いのくまさん」

Press
Release



▲(上) 1.《驚く可き風景 (A)》1969年 ▼(下) 2.《顔・大・鳥。》1991年



猪熊弦一郎展

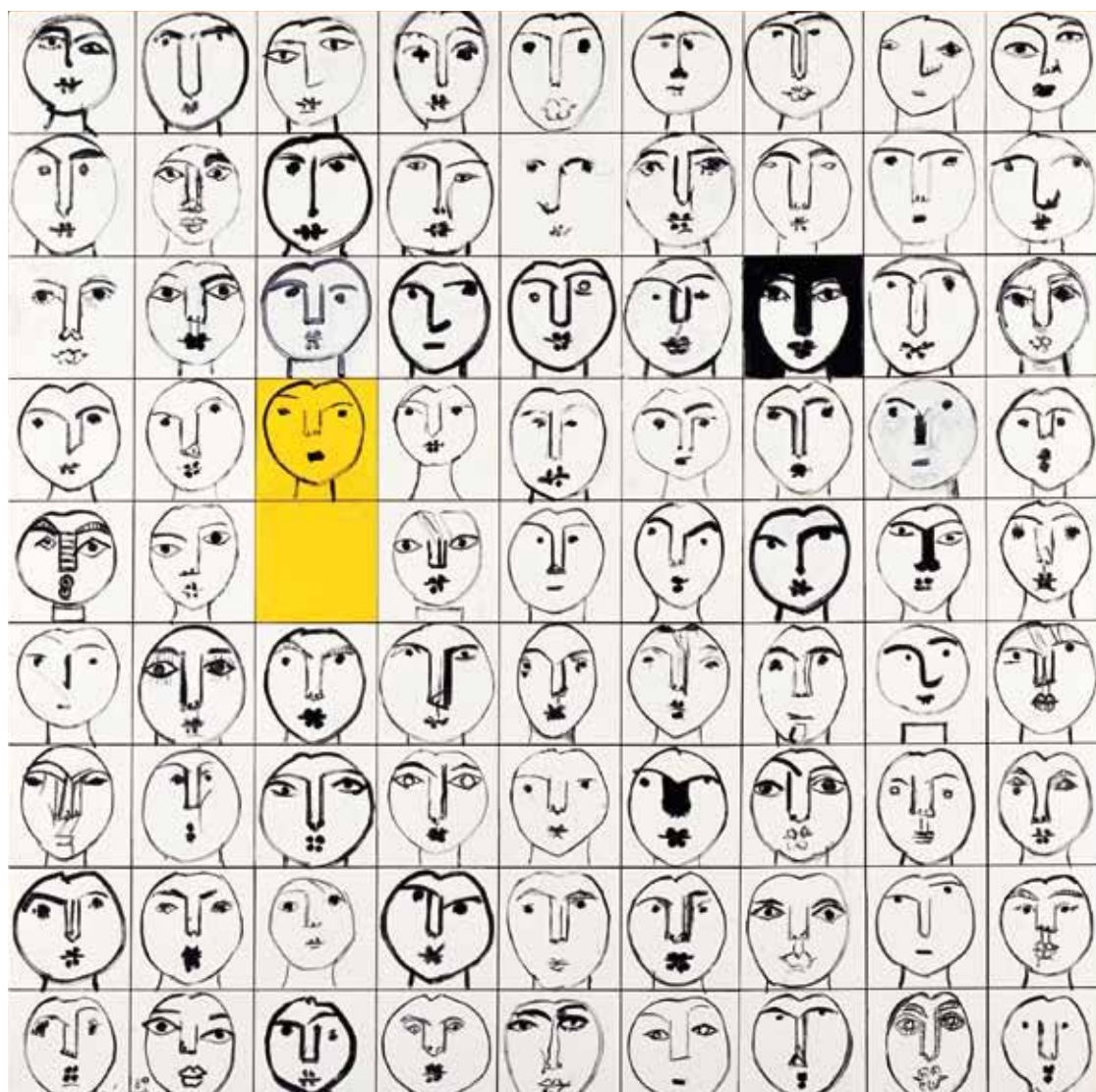
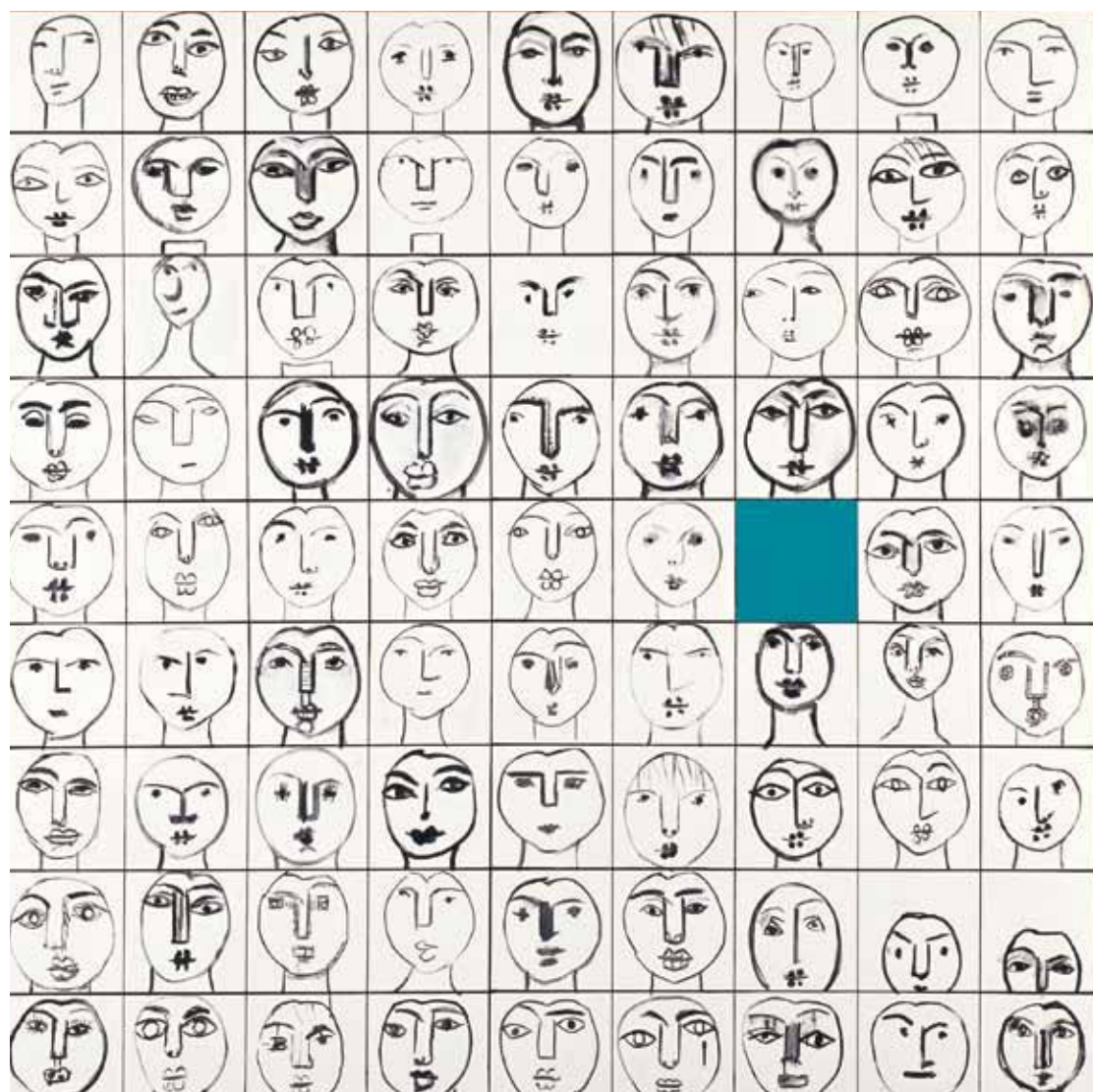
Genichiro Inokuma INOKUMA SAN

「いのくまさん」

2017. 7. 8 sat → 8. 27 sun

うらわ美術館
URAWA ART MUSEUM

▲(左上) 3.《顔35》1989年 ▲(右上) 4.《顔15》1989年 ▲(右下) 5.《題名不明》1992年 ▼(左下) 6.《Faces 80》1989年 ▼(右下) 7.《顔80》1989年



猪熊弦一郎展

Genichiro Inokuma INOKUMA SAN

2017.7.8 sat→8.27 sun

うらわ美術館
URAWA ART MUSEUM

「いのくまさん」

いのくまさんは
たのしいな
文・谷川俊太郎

ぬりえを
しょう

いろが
うたう

いろが
さげぶ

いろが
ささやく

あんな
いろ

こんな
いろ

いのくまさんは
すき

かたは
のびる

かたは
まがる

かたは
つながる

かたは
かぎらない

あんな
かたち

こんな
かたち

いのくまさんは
すき

おもちゃが
すき

いのくまさんは
すき

ねこも
すき

いっぱい
いっぱい

ねこを
かく

いのくまさんは
すき

たくさん
たくさん

かおを
かく

ほかの
ひとの

かおを
かく

たくさん
たくさん

いのが
すき

いのが
すき

いのが
すき

いのが
すき

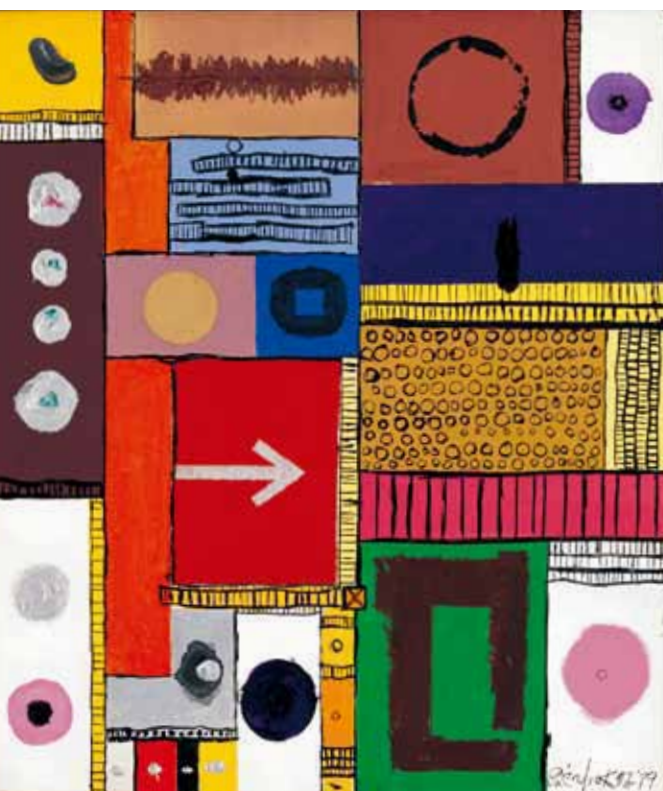
いのが
すき

いのが
すき

いのが
すき

いのが
すき

17.《ニューヨーク九十五丁目の矢じるし》1979年



いのくまさんは「絵として美しい事」を大切なこととしていました。そして、ごく初期から色面の組み合わせを意識していました。徐々に画風が変化した中でも感じられるいのくまさんらしきはこの卓越した色のバランス感覚なのかもしれません。

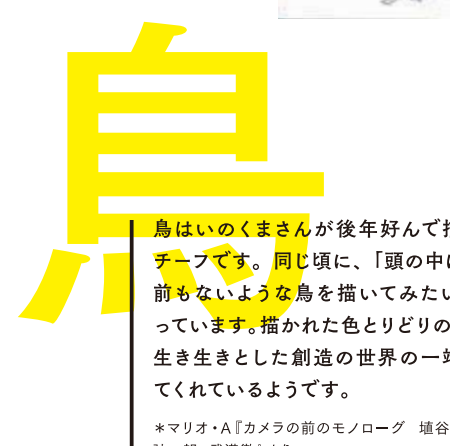


15.《題名不明》1954年
Photo: Takashi Homma

抽象画は難しいと敬遠なさる方もいらっしゃると思いますが、いのくまさんは次のように思っていました。「何をかいてあるのかわからなくても、美しいというのがわかれれば、それがいらばいい絵のみかたです。」*
*「歩く教室」『少年朝日』1950年12月号より



14.《題名不明》1954年



鳥はいのくまさんが後年好んで描いたモチーフです。同じ頃に、「頭の中にある名前もないような鳥を描いてみたい」と語っています。描かれた色とりどりの鳥達は、生き生きとした創造の世界の一端を見せてくれているようです。
*マリヲ・A「カメラの前のモノノゾク 横谷雄高・猪熊弦一郎・武蔵徹」より



7.《顔80》1989年



9.《題名不明》1912年頃



8.《自画像》制作年不明



11.《二人の子供》1950年



10.《マドモアゼルM》1940年



12.《顔11 (K)》1992年

顔

一人の面々が描いたとは思えないほど、色々な絵を描いたいのくまさんですが、人物表現においても実に様々。沢山描かれた顔の中から、お気に入りを探してみませんか。

【展覧会趣旨】

うらわ美術館ではこの夏、「猪熊弦一郎展『いのくまさん』」を開催します。

猪熊弦一郎(1902-93)は香川県に生まれ、東京美術学校の藤島武二教室にて西洋画を学びました。その後、帝展で活躍しましたが、改組をきっかけに小磯良平らと新制作派協会を設立し、東京、パリ、ニューヨークと拠点を移しながら、晩年まで旺盛な制作活動を続けました。

この展覧会は猪熊弦一郎とその作品を子どもたちに紹介するために作られた絵本『いのくまさん』から生まれました。

こどもの ころから
えが すきだった いのくまさん
おもしろい えを
いっぱい かいた

つつい口ずさんでしまうような言葉で始まる詩は、谷川俊太郎がこの絵本のために書き下ろしたものです。初期人物像をはじめとする具象画から、渡米後の抽象画、そして具象抽象を超えた独自の表現へと展開してゆく猪熊の作品制作における変容の様子が、250字余りの平仮名によるシンプルな言葉で紡ぎ出され、真に広がった作品と呼応しています。

会場では詩を展示空間に大きく配置する等、鑑賞者がまるで絵本の中に入ったような展示を計画しています。

生前、猪熊は「絵を描くというのは大変なことだけれども楽しい」そして、「いままでになかったものを新たに探していく喜びみたいなものがある」と著作の中で述べています。会場を訪れる子どもたちが、創作の喜びを見つけるきっかけをきっと掴んでくれることでしょう。

【展覧会のポイント】

- ★絵本に即して「顔」「鳥」「猫」「色」「形」といったテーマをもとに9部で構成します。
- ★約150点(タブロー62点、ドローイング49点、立体作品約30点、映像2点)出品を予定しております。
- ★ご家族で一緒に作品を楽しむことが出来る展覧会です。
- ★鑑賞後、自由に工作したり、絵を描いたりできるコーナーがあります(無料！)。

【作家略歴】

- 1902年 香川県高松市生まれ。少年時代を香川県で過ごす。
- 1922年 東京美術学校(現 東京藝術大学)に入学。藤島武二教室で学ぶ。
- 1926年 帝国美術院第7回美術展覧会に初入選。以後、第10回、第14回で特選となるなど、1934年まで主に帝展を舞台に活躍する。
- 1936年 小磯良平、脇田和らと新制作派協会(現 新制作協会)を結成。以後、発表の舞台とする。
- 1938年 フランスに遊学(～1940年)。
- 1950年 三越の包装紙「華ひらく」をデザインする。
- 1951年 上野野村の大壁画《自由》を制作。
- 1955年 再度パリでの勉学を目指し日本を渡つが、途中滞在したニューヨークに惹かれそのまま約20年間同地で制作する。
- 1975年 ニューヨークのアトリエを引き払う。その後、冬の間をハワイで、その他の季節は東京で制作するようになる。
- 1991年 丸亀市猪熊弦一郎現代美術館開館。
- 1993年 東京にて没。90歳。



【関連事業】

- ギャラリートーク
7月22日(土)、8月20日(日) 各日14:00～
当館学芸員による展覧会および作品解説。※自由参加、当日の観覧券が必要。

○創作コーナー

- 7月15日(土)～8月27日(日) ギャラリーD
自由に工作したり、絵を描いたりできるコーナーを設置。※自由参加、参加無料

○図書館員とボランティアによる絵本の読み聞かせ会

- 7月21日～8月27日の期間中、毎週火曜日・金曜日。全11回を予定。
情報コーナーもしくはギャラリーD
幼児、小学生を対象に、絵本の読み聞かせ会を実施。※自由参加、参加無料

【次回以降開催展】

- 「Musubu 本とアート：東京ーカリフォルニアーうらわ」(仮題) 9月12日～9月24日
「ここがみどころ スポットライト！うらわ美術館」(仮題) 11月18日～2018年1月14日

報道関係 お問い合わせ

うらわ美術館
〒330-0062 さいたま市浦和区仲町2-5-1
浦和センチュリーシティ3F
TEL:048-827-3215 FAX:048-834-4327
http://www.city.saitama.jp/urawa-art-museum/

【開催概要】

展覧会名：猪熊弦一郎展『いのくまさん』

会期：平成29年7月8日(土)～8月27日(日) (44日間)

休館日：月曜日(7月17日は開館)、7月18日(火)

開館時間：午前10時～午後5時、土曜日・日曜日のみ～午後8時(入場は閉館の30分前まで)

会場：うらわ美術館 ギャラリーA・B・C・D

主催：うらわ美術館、読売新聞社、美術館連絡協議会

特別協力：丸亀市猪熊弦一郎現代美術館、公益財団法人ミモカ美術振興財団

協賛：ライオン、大日本印刷、損保ジャパン日本興亜、日本テレビ放送網

観覧料：一般610(480)円、大高生410(320)円、中小生以下無料

※()内は20名以上の団体料金

※障害者手帳所持者および付き添い1名は半額

※リピーター割引：観覧済みの有料観覧券提示により、団体料金(観覧日から1年、1名、1回限り有効)

広報用に作品の画像データ(JPEG)をご希望される方は、左記までお問い合わせください。

- ・作品写真のご使用は、本展をご紹介いただける場合に限らせていただきます。それ以外の使用はご遠慮ください。
- ・作品写真をご掲載の際は、他のイメージを重ねたり、トリミングすることはできません。
- ・画像をご利用の際は、作品キャプション「作者名・作品名・制作年」及び「©公益財団法人ミモカ美術振興財団」を必ずご記載下さい。
- ・掲載記事・番組内容につきまして、基本情報確認のためグラブリ・原稿の段階で当館までFAXまたはメールにてお送りください。
- ・お手数ですが、掲載紙・誌・映像等は左記、広報担当者までお送りくださいますよう、お願い申し上げます。